
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 88

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1741. 絶え間ない出発と終わりの向こうにある確かな終わり
- 1742. 通り雨の哀愁
- 1743. 五年前、そして五年後
- 1744. 長期的な協働プロジェクト
- 1745. 作曲ノート
- 1746. ほのかな秋の一日の断片
- 1747. 私が今に、今が私になる時へ
- 1748. 強い印象を残す夢の前半:循環数列の破れとロバート・キーガン教授
- 1749. 強い印象を残す夢の後半:全ての歴史を知る愛犬
- 1750. 自己それは刹那の気づき
- 1751. 理論やモデルの検証可能性と反証可能性について
- 1752. 概念モデルの検証と巫女
- 1753. 探究心に燃えた人間の隣で
- 1754. 厳しい成績評価
- 1755. 時の流れぬ時の最果てで
- 1756. 夢遊病とライフワーク
- 1757. 今学期の試験の終了
- 1758. これから
- 1759. 今日と明日、そしてこれからも
- 1760. 息づく破壊衝動と夢

1741. 絶え間ない出発と終わりの向こうにある確かな終わり

今朝は六時前に起床し、六時から仕事を開始した。書斎の窓の外から見える街灯を眺めていると、闇の世界の奥にある確かな光の存在について知る。

遠方から小鳥の鳴き声が聞こえた。それは光の方へ導いてくれる音の手綱であるように思えた。

今日は日曜日であるが、平日も週末も全く変わらず、同じペースで自分のなすべきことに取り組めることは幸せである。このペースはすでに自分の中で強固な習慣になっており、それは自分の意思と規律によってもたらされたものかもしれないと思う。そして何より、そうした意思と規律を包むかのように、自分の情熱がその背後に存在していることが重要であろう。

数日前、人はいくつになっても何かを始めることができるということに対して、ひどく感動した。仮眠をとりながら、目頭が熱くなっていたのは、その尊さに対してのものだったように思う。その感動の根源をより探っていくと、人は終わりが来ることを知りながら、何かを始めることが常にできるということに、強い感動を覚えていた。

終わりに向けての出発だけがそこにある。人は終わりが来ることを知りながらも、絶えず出発を続けていくのである。

絶え間ない出発。終わりのない出発の向こうにある確かな終わり。人はそうした終わりに向けて、いついかなる時でも出発をすることができる。何かを始めることに関して、遅いなどということはないのである。なぜなら、私たちは絶えず出発することを宿命付けられた存在だからである。

終わりに向けての出発が持つ儚さに気づくことができるだろうか。数日前、私が感動を抱いていたのは、そうした儚さに対してであった。それを私は、「儚さの向こう側にあるものに対する感動」と表現していたように思う。

今日も私は、終わりのない出発を行い、そして同時に、確かな終わりに向かっていくのだろう。

昨夜就寝前に、音楽が引き起こす美的体験について考えていた。正確には、そうした美的体験を音楽実践を通じて探究していくのと同時に、哲学の観点からも探究をしていきたいという思いが高まっていた。

哲学には美学という領域があり、その領域についての探究をこれから深めていきたいと強く思う。来年に所属する予定の大学で提供されている美学に関するコースを是非とも聴講したい。自分の関心が多岐にわたっていることを改めて実感するが、結局自分は何を仕事として形にしていくのかをまだ決めかねているように思う。端的には、科学、哲学、音楽のどの領域に関して、仕事をなしていくかということを決めかねているのである。二元論的ならず三元論的に考える必要はないのだろうか。理想は、やはりそれら全ての領域に深く関わり、全ての領域の中で形となる仕事をしていきたいと思っている。

これからの方向性をより明確にするためには、まだ時間が必要なのだと思う。こうした課題が自分に降りかかってきたのは比較的最近のことであるから、時間をかけてそれと向き合い、時間の経過の中でその課題を溶解させていく必要があるだろう。今日という一日は、現在抱える課題にとって不可欠な時間となるだろう。2017/11/5(日)07:09

No.386: Harmonic Accompaniments

How intriguing harmonic accompaniments are. I learned various techniques of harmonic accompaniments such as block chord accompaniment and broken chord accompaniment. I just applied the former accompaniment technique to my music, and I found that the harmony was very interesting. I had a childlike jubilation for the sound derived from the harmonic accompaniment. Since harmony is a profound topic, I will delve into it. I will have a sweet or harmonic dream tonight. 22:03, Wednesday, 11/15/2017

1742. 通り雨の哀愁

晴れ渡る空が見えない日が続く。今目に映る上空の薄い雲は、そうした抜け道のないどんよりとした連続的な日を象徴している。

午前中の仕事ははかどり、このままの調子で進めていけば、今日予定していた仕事を全て午前中に終わらせることができるかもしれない。今日の仕事が早く終われば、久しぶりに和書を読み、そして作曲実践に多くの時間を充てたい。

一日分のコーヒーを入れ、書斎の窓越しで少しばかり休憩をしていた時、目の前の木々に種類の異なる小鳥たちが止まっていた。しばらく彼らの様子を観察してみることにした。

身動きせずにピタリと止まっている小鳥もいる一方で、絶えず枝から枝へと飛び移っている小鳥もいる。顔をキョロキョロさせている一羽の小鳥が目についた。彼は一体何を見ているのだろうか。正確には、彼の目を通して、この世界は一体どのように見えているのかに強い関心を持った。

鳥には鳥固有の世界があり、それを外部観察者として完全に理解することはできない。外部観察にはどうしても限界があり、内部世界をありのままに観察するためにはその世界に入っていかなければならない。科学的な探究手法の限界はまさにここにある。

私は最近よく、小鳥たちの姿を見ながら、この世界に彼らが人間と一緒に生きていることを不思議に思う。これは他の動植物についても同じであり、極論すれば、自分以外の人間がこの世界に存在し、一緒にこの世界を共有していることに対する不思議さが私の中にある。

なぜこの世界には、他者がいるのか。そして、なぜこの世界は、「多者」で溢れているのだろうか。そのようなことをいつも思う。

個人に一つの内側の世界と外側の無数の世界。つまり、一つの存在に固有の内面世界と、存在者の数だけ存在する内面世界が共有される大きな世界の存在に思いを巡らせると、しばらく言葉を失う。

片手に持っていたコーヒーを一口飲んでみると、そこに喚起される一つの固有の感覚に深く沈み込んで行こうとする自分がいた。目を閉じてコーヒーを飲んでみると、心眼に鮮明な映像が映った。それはいくつかの映像が混じり合ったものであり、有意味な形として言葉にすることはできない。だが、一口のコーヒーがそうした現象を引き起こしたことだけは確かだった。

遠くの空に富士山のような白い雲の塊が現れた。その上空は晴れ渡っており、雲山の峰がはっきりと見えるかのようである。

日本の富士。私はそれをしばらく見ていない。

今この瞬間に、オランダの地で富士山を彷彿とさせるような雲の大群を拝むことができ、少しばかり神妙な気持ちになる。すると、雨がポツポツと地上に降り注ぎ始めた。

富士山のような雲が見える遠くの空は晴れているのに、自宅の上空には雨雲がかかっているようだ。晴れている世界を眺めながら雨の降る世界の中にいる感覚をどのように形容することができるだろうか。喜びの世界を眺めながら悲しみの涙を流すような感覚だろうか。しかし、今の私には、喜びも悲しみの感情もない。より透き通った無色の感情だけがここにある。

雨はすぐに止んだ。わずかばかり降った雨の痕跡が、書斎の窓ガラスに付着している様は、どこか深い哀愁を漂わせている。2017/11/5(日)10:28

No.387: Mysterious Sound and Temporal Lobe

I had a mysterious dream last night. In the dream, I listened to a melodious but artificial sound from a machine on wide stairs in a shopping center. I realized that the sound activated my temporal lobe. After I listened to it for a while, I decided to leave there. Yet, I suddenly felt dizzy and stopped on the spot.

Once I made sure that I was fine, I began to walk. I knew that my brain function tremendously improved, which enabled me to immediately grasp any causal relationships very deeply. For instance, I could understand a hidden reason why a man passing by me planned to purchase a specific product in this shopping center and where he came from and where he would go.

Any convoluted logical strings of the phenomena that I see at that moment were disentangled instantly. The impression of the dream still remains in my mind. 08:26, Thursday, 11/16/2017

1743. 五年前、そして五年後

日曜日が終わりに近づき、明日から新たな週を迎える。天気予報によると、明日の最低気温は0度になるらしい。11月に入ったばかりだというのに、もうマイナスの世界があと一步のところまで見えている。明日は特別に寒いようだが、こうした日が一日でもあれば、マイナスの世界が継続的にやってくる日も遠くないだろう。

明日は、久しぶりにマイナスに近い寒さを経験することになる。一体そこで自分の感覚はどのように反応し、どのような反応を生むのだろうか。

昨日に引き続き今日も、この五年間の自分の歩みについて少しばかり振り返っていた。この振り返りをもたらしたのは、ちょうど今携わっている協働プロジェクトのために、五年前に自分が作成した資料を眺めたことがきっかけとなった。振り返ってみると、五年前の今頃はちょうど、ロバート・キーガン教授と初めて会った時期だったように思う。当時は、ジョン・エフ・ケネディ大学の一年目の終わりの時期に該当し、成人発達理論を本腰を入れて探究していた時だったように思う。

あれから早いもので五年の月日が流れた。この五年の月日の重みを見過ごすことはできない。無我夢中で日々を生きていく過程の中で、気がつかないうちに、様々な知識と経験が自分の内側に蓄積されていったことに気づかされる。

五年間の時間軸で眺めてみれば、人というのは確かに変容するというのを身を持って教えられる。人はしかるべき場所でしかるべき活動に従事していけば、ゆつくりとであるが着実に発達を遂げていくようだ。

場所と活動の重要性を無視することはできない。私たちは、自分にふさわしい環境で、自分の取り組むべき事柄に絶えず従事しなければ、五年という月日が流れても一向に発達を遂げていかないとと言えるだろう。

自分自身を振り返ってみても、その時点の自分にふさわしい場所に絶えず身を置くことができている幸運には感謝をしなければならない。現在私が生活と活動を営んでいるこの土地も、今の自分に

最適な環境だと言える。一つのふさわしい環境が次のふさわしい環境を呼び、そこに自分を連れて行く。場所から場所への連鎖の中を自分は生きているようなのだ。

次の場所は、近いうちに必ず自分の目の前に現れるだろう。オランダで過ごすこの二年間の間に、次の場所へ向かうための準備が整ったのであれば、必ず次の土地が自分を呼ぶだろう。

今の私は、自分が取り組むべきことだけに専心したいと思う。とにかく自分の望む活動だけに従事する生活を死守し、それを育んでいく。不必要なものと望まないことを極限まで削ぎ落とし、充実さと幸福さを感じられる活動だけに従事する生活の実現。それは、極めて豊かな生活であり、同時に質素な生活であると言える。

精神的に豊穡かつ物質的に簡素な生活を心がけていく。そうした生活の中で日々を生きていくことが、新たな活動対象を認識させ、それに取り組むべき新たな場所への扉を開く。

今日の日から五年後の自分は、一体どのような存在になっているだろうか。ここから五年という年月を今と同様に積み重ねていけば、今の自分には全く想像できない場所に辿り着けるような気がしている。五年前の自分が今の自分を全く想像できなかったように、それは本当に実現されるだろう。

2017/11/5(日)20:02

No.388: Assignment about Systematic Review

I finished writing the first draft of the assignment about systematic review. All of the assignments in this course have well-organized sequences so that I can deepen my understanding of systematic review step by step.

Tackling with the assignment, I have read required reading materials several times, which sharpened my understanding of the specific process of systematic review. I am gradually grasping the requirements and procedures of the initial step of systematic review. I look forward to the next lecture. 14:43, Thursday, 11/16/2017

新たな週を迎えた。今日の最低気温は0度を記録するらしい。0度に達するのは、今日の深夜からだが、日中も冷え込むことが予想される。今朝は早朝から、普段よりも暖房を早くつけ、温度をいつもより少しだけ高く設定した。

昨夜も夢を見ていたのだが、その内容をうまく思い出すことができない。その夢が決して重要でなかったというわけではなく、むしろ逆かもしれない。何か感覚に訴えかける夢を見ていたのは確かであり、夢が引き起こす強い感覚によって一度目覚めた。五時半に目覚めた時、そこから起床して良かったのだが、もう一時間ほど寝る必要があるように思えた。

昨日に習得した事柄を消化させる時間をもう少し設けた方がいいのではないかという直感が働き、今朝は結局六時半に起床した。そして、七時前に今日の仕事を開始させた。

今日は午前中に、先日に正式に決まった、ある日本企業との協働プロジェクトのキックオフミーティングを行う。担当の方とは一年間一緒にプロジェクトの構想を練り、それが無事に始まることになり大変嬉しく思う。とりあえずは今年度中にプロジェクトの初期段階を終え、来年度以降も引き続きプロジェクトが継続していく流れになっている。日本に関与するプロジェクトに対して、どれも長期的な視野を持って取り組むことができているのはとても幸運に思う。

とりわけ二つの大きなプロジェクトは、数年先を見越した長期的なプロジェクトであり、協働者の方たちと時間をかけながら仕事を進めていくことができるのは、本当にありがたいことだと思う。私たちの学習や発達と同様に、人が真になす仕事には時間がかかる。

ゆっくりと、それでいて着実に、これらのプロジェクトを前に進めていこうと思う。それらのプロジェクトがいつか終了するとき、プロジェクトそのものがどのような深まりを見せているのか、そして協働者の方を含め、自分自身がどのような変化を遂げているのか、今からとても楽しみである。

午前中のミーティングが終了すれば、ここ数日に引き続き、「評価研究の理論と手法」の最終試験に向けた準備を行っていく。先々週あたりに一度解答した昨年の試験問題を昨日再度眺めてみると、初見の時と比べて随分と印象が変わった。先々週においては、二冊の課題図書を脇に置き、そ

れを参照しながらでなければ問いに答えることができなかったが、今となつては、そうしたテキストを参照することなく解答ができるようになっている。これはここ数週間の間に私の内側に起きたミクロな成長だろう。

このコースでは、習得しなければならない概念が多く、それらの関係性を踏まえながら、意味のネットワークを構築していくことは容易ではなかった。しかし、そもそも自分の頭の中には、強固な意味のネットワークを構築していくという大前提があったため、そのための工夫と試行錯誤を自然と行う自分がいた。それらを経たことによって、昨日に感じられた進歩があるのだと思う。

今日行ふべきことは、テキスト内の概念や考え方を意味のネットワークとしてまとめた資料を大学で印刷し、それに肉付けをしていくことだ。必要であれば、より分かりやすく言い換えを行い、印刷された資料をここから数日間の期間において何度も繰り返し読み込んでいく。それを木曜日の朝の試験まで続けたいと思う。2017/11/6(月)07:14

No.389: Paper Revision

I got up around 5:30 and started today's work at 6:00. I will complete the final draft of the paper for the conference of the International Society of the Learning Sciences in 2018. Since I received some feedback from my supervisor, I will revise the paper based on his feedback, which is the first work today for me.

After I finish revising it, I will send the revision to my supervisor. I hope I don't need to review it anymore. I plan to submit it tonight. I look forward to the participation in the conference in London next year. 06:37, Friday, 11/17/2017

1745. 作曲ノート

とても些細なことかもしれないが、昨日からノートを二冊に分けることにした。これまでは、日々の新たな発見や気づきを簡単にメモすることや、今後の計画を立てるためのノートが一冊だけあり、それを日々活用することが続いていた。しかし昨日から、作曲専用のノートを別に設けることにした。当

初は、同じノートに作曲に関する事柄を書き記していこうかと考えていたが、あえて分けた方がいいと判断した。

作曲専用のノートでは、作曲実践を通じて得られた気づきを書き留めることや、作曲実践を離れている際に思い浮かんだ曲のアイデアなどを書き留めるようにしている。また、曲を作る過程の中の試行錯誤をそのまま記録するような役割を持たせることにした。

現段階ではまだ、作曲ソフト上だけで曲を作ることが難しく、どうしてもノートにあれこれ書き出しながら作曲を進めていく必要がある。確かに、キーボードを打つことも手を動かしていることに他ならないが、思考過程をノートに書き出すことは、同じ手を動かすことであってもより意味が大きいように思える。

頭の中にあることを書き出してみるのは、実に不思議な力を持つ。ノートに思考内容を書き出すことによって、それらが可視化され、一つ一つの思考対象に焦点を当てることが可能になる。そこから思考の建築運動が開始され、一つ一つの思考対象が組み合わせられ、何か一つのより大きな形になっていく様子を観察することができる。昨日からノートに思考過程をできる限り書き出すことによって、随分と多くの気づきが得られ、作曲もより行いやすくなっていった。

思考過程をノートに書き出すことは、気づきの連鎖を生むことも忘れてはならない。一つの気づきがまた別の気づきを生んでいく。厳密には、一つの問いが一つの回答をもたらし、その回答がまた新しい問いを生み出していくという連続的な流れがそこにある。そうした流れを生み出し、その流れの中で実践を継続させていくためには、実践過程で生じた諸々の問いや気づきをノートに書き出しておくことが重要になるだろう。

今のところノートには、コード進行を書き留めている数列と各コードのキーを書き出し、曲のイメージや試してみたいことなどが記録されている。数字、アルファベット、音楽記号が書き出されているノートを見返すと、それだけで新しいアイデアが湧いてくるかのようだ。とにかく、作曲に関する日々の気づきと発見、そして疑問点などについては、全てこちらのノートに書き出していくようにしたいと思う。

昨夜は曲を作りながら、自分はまだ曲の中に反復をうまく取り入れることができず、曲に安定性が欠けているという気づきを得た。ダイナミックシステムの発達と同じように、曲も反復を通じて発達をして

いく。ただし、ダイナミックシステムにせよ、曲にせよ、そこで生じる反復は、同一の反復というよりもむしろ、若干の差異を含んだ反復である。もちろん、完全に同一の反復が生じることもあるが、それよりも圧倒的に多いのは、微細な差異を含んだ反復なのだ。

私はどうもまだ、こうした微細な差異を含む反復を曲の中に盛り込んでいくことができていないようだ。反復をさせようとする、その差異があまりに大きく、安定感を欠いたものになってしまう。安定感を欠いているというのは、曲が向かっていく方向性がわからず、結局何を表現したい曲なのかわからなくなってしまう状態を指している。最適な差異を持つ反復を見極めていく感度と、それを実際に曲の中に盛り込んでいく技術を養っていく必要がある。

昨夜に実験的に作っていた曲も、最適な反復を生み出すことができておらず、安定感を欠いているような印象を受けた。これもまた一つの仮説に過ぎないが、ベースの音をもう少し固定した方がいいのかもしれない。ベースが不規則に踊り出すと、それは曲全体の不規則性を助長することにつながっている気がする。昨夜の作曲実践の後にそのような仮説が生まれ、今日の作曲実践ではその仮説を検証してみたいと思う。

反復さがもたらす安定性の中に驚きを盛り込んでいくのは至難の技だが、安定性の中に潜む動的な要素こそ、曲やダイナミックシステムが躍動する肝だろう。2017/11/6(月)07:47

No.390: The Early Bird Catches the Worm

By virtue of getting up early, I have already finished the first work today; that is to complete the final version of the paper for an international conference next year. I sent it to my supervisor. From now, I will write a problem statement for my new research that investigates MOOCs. After writing it, I will elaborate my writings of the first assignment for the course of systematic review.

Since I will go on a two day one night trip tomorrow to Arnhem where is located in the eastern part of the Netherlands, I want to complete some tasks to do by the end of today. Visiting the Hoge Veluwe National Park and the Kröller-Müller Museum in the park will be memorable in the second year of my living in this country. 08:44, Friday, 11/17/2017

天気予報に反して、今日は晴天に恵まれている。早朝に雨が少々降ることがあったが、昼食前にはすっかりと晴れ間が広がり、秋に固有のほのかな太陽光がフローニンゲンの街に降り注いでいた。

午前中の仕事を終え、昼食前に大学のキャンパスに立ち寄った。木曜日に迫った「評価研究の理論と手法」のコースの最終試験に向けて、昨年の試験問題を印刷するために、大学のキャンパスに向かった。印刷をすることしか用事がなかったため、外着に着替えるというよりも、部屋の中の服装とほとんど変わらない運動着に着替え、ジョギングをしながらキャンパスに向かった。

キャンパスに向かう最中にいつも通っているノーダープラントソン公園が、いつも以上に輝きを増しているように思えた。公園に足を踏み入れた時には、すでに昼前の時間帯であったが、どこかまだ早朝のような雰囲気を出していた。公園内を行き交う人の数は少なく、薄黄色の太陽光が公園に優しく降り注いでいた。

秋も深まったノーダープラントソン公園は、静かに多くのことを私に語りかけているように思えた。明日も晴れるそうであるから、明日は昼食前にまたこの公園内をランニングしたいと思う。

キャンパスに到着し、PCルームで印刷をしようと思った時、ついでに来学期のコースの課題論文を印刷しておこうと思った。大学のポータルサイトから、来学期に履修予定のコースのページに飛び、そこで課題論文を印刷した。

来学期は、「システムティックレビューの執筆方法」と「応用研究手法」のコースと、論文執筆に関する個別指導を担当教授から受ける。先ほど印刷をしたのは、システムティックレビューの執筆に関するものだった。このコースを通じて、学術論文としてシステムティックレビューが行えるようになるだけでなく、今後の自分の執筆にもこの方法を活用していきたいと思う。

システムティックレビューとは一体何であり、何を目的にしたものであり、それをどのように行っていくのかという理論を学び、実際にシステムティックレビューを自ら執筆してみることが、このコースで課

せられている。理論と実践を通じて、システマティックレビューという文章執筆方法に習熟したいと思う。

今日はこれから夕食までの数時間にわたって、「評価研究の理論と手法」の最終試験に向けた準備を行う。具体的には、数日前に完了した要約文をもう一度手書きでノートに書き出すというを行う。要約文は全てパソコン上で作成されたものであり、知識項目をネットワーク的に配置したものである。ネットワークのノードである一つ一つの知識項目をもう一度自分の言葉で言い換えたり、文章に修正を行いながらノートに書き出していく。その際には、特にノードとノードとの関連を意識しながら、一つ一つの意味を精査し、それを身体知の次元で格納しておくことが必要となる。それを実現させるために、手書きで要約文を再度書き出すというのは効果があるだろう。

これから夕食までの時間は、手書きで文章を書き出していく作業に愚直に従事する。予定通りに全てが完了したら、今日も夜に作曲実践を行いたい。2017/11/6(月)13:44

No.391: To Arnhem

I got up at five. I will leave my house at 6:20 to visit Arnhem. It is still dark outside. Although I had to get up early today, I had enough sleep last night. Since it is Saturday, the train route is different from usual; I have to go to Leeuwarden first then to Zwolle. I took a small train toward Leeuwarden, where I have never been. 06:53, Saturday, 11/18/2017

1747. 私が今に、今が私になる時へ

遠くの空に薄い雲がかかっており、その中に夕日が入り込んでいった。薄い雲を貫くかのように、夕日がこの世界を照らし続けている。その一群の雲の横には一切の雲がなく、薄い青空が広がっている。

一つの飛行機が、飛行機雲を生み出しながら遙か上空を進んでいくのが見える。それは、夕方の空にゆっくりと流れる流れ星であるかのように見えた。

日々の一つ一つの何気ないことが、自分に強い感動をもたらすようになった。自分の中に眠っていた感受性という感覚が、ある時期を境に一気に解放されたかのようなのだ。

日々の生活の中に、感動を引き起こすものが無数に存在していることに気づかされる。今日の前に見える夕焼けの輝き、流れ星のように去っていった飛行機雲、それらありふれた存在の中に感動の原子を見出すことができる。

昼食前に、近所のノーダープラントソン公園を歩いていた時、なぜだか私は、そこに地元の瀬戸内海の輝きを見て取っていた。平穏な佇まいで存在している瀬戸内海、そして海面に光る太陽の輝きを、私はオランダにある一つの公園の中に見ていた。

10年前と10年後。時間が前後に揺れ、両者の時間の中に私はいた。振り返ってみると、今から10年前、当時の自分が今のような姿になっているとは到底想像できなかった。当時の自分は、欧州の地で生活をしている今の姿、そして今のような暮らしぶりを想像することができただろうか。そのようなことは想像できなかっただろう。だが、今現実起こっているこの事態をどのように解釈したらいいだろうか。

今、私はヨーロッパの地で暮らしを営み、日々探究生活を送っている。このような場所で、このように生きていることなど当時の自分には想像もつかなかったことだろう。しかし、それが現実として今起きているということの中に、私は大きな驚きを隠すことができない。自分のこれまでの10年は、途轍もない意味を帯びている気がしてならない。

なぜ10年前の自分には想像できなかったことが、現実起こりうるのだろうか。考えれば考えるほどに、それは畏怖の念を引き起こす。

10年間の小さな進歩。言語に関して言えば、自分の中にある日本語も英語も驚くほどに変容を遂げた。10年前の自分の日本語と英語の文章について、それがどのようなものであったかを容易に思い出すことができる。そこから今に至る進歩は、たとえそれが他者から見た場合に小さなものであったとしても、自分の中では驚くほどに大きな進歩であるように思える。

ほんの10年前の自分が、今となっては遠い存在のように思えてくる。ここから10年後の自分はどうか。それもまた、非常に遠い存在のように思える。10年後の自分から今の自分を眺めれば、今の自分は遠い存在になってしまっているのだろうか。それはどこか非常に寂しい感覚を引き起こす。この寂しさをもう少しうまく表現したいと思う。

この瞬間の今の自分が、とても遠い存在になってしまうというこの感覚を、一体どのように説明すればいいだろうか。自分が自分という自分ではないものになっていくということ。あるいは、自分が自分ではない自分になっていくということ。それらは共に発達の要諦だ。

発達には、こうした一抹の寂しさがどこことなく付きまとう。人が発達をしていくというのは、こうした寂しさと向き合っていくことを意味しているのかもしれない。

いつかこうした寂しさの感情そのものが変容し、自分が一つの全体として、絶え間なく流れる今という瞬間の中で生きれるようになることを望む。私が今になり、今が私になった時、「それでいいのだ」という言葉だけが聞こえてくるような気がしている。2017/11/6(月)16:42

No.392: On a Train to Leeuwarden

It takes three hours in total from Groningen to Arnhem, though it takes two and half hours on weekdays. During the trip on a train, I will read a book about music composition and a couple of academic articles for the courses next week. I tried not to bring too many readings. I think that one book and three articles are sufficient for this short trip. Basically, I will read them on a train or in a hotel. The location of the hotel at which I will stay tonight would be fabulous because it is close to the national park in Arnhem. I expect nature to share vital energy with me. 06:59, Saturday, 11/18/2017

1748. 強い印象を残す夢の前半:循環数列の破れとロバート・キーガン教授

昨夜、最近を振り返ってみても、最も印象に残ると言ってもいいだろう二つの夢を見た。

夢の中で私は、日本のどこかの宿泊施設にいた。それはホテルというよりも、どこか和的な雰囲気を出す旅館であった。そうした旅館の外に、なぜだかプールがあり、そこで私は友人と少しの間くつろいでいた。身体を鍛えるために激しく泳ぐというわけではなく、プールに入って水と戯れ、身体をほぐすようにリラックスした形で泳いでいた。

プールから上がり、旅館に戻ると、ある友人が一つの問いを私に投げかけた。

友人A:「今、美学に関するある問題がどうしても解けなくて困ってるんだ。一つの循環数列の破れに関する問題なんだけど」

私:「どんな問題？」

友人A:「うん、ある循環数列が途切れ、再び循環数列に戻る時、そうした回復現象がなぜ起こるのか？という問いなんだけど・・・」

友人が考えている問題について話を聞いた時、実に面白い問いだと思った。ここで私は全く気付かなかったが、夢から覚め、よくよく冷静にその問いについて考えてみると、それは美学の問題なのかどうか定かではない。問いの外装から考えるに、どうもそれが数学の問題のように思える。この夢はまだ続く。

友人B:「二人とも何について考えてるの？」

友人A:「美学に関する問題なんだけど、これ分かる？ある循環数列が途切れ、それが再び元の数列に戻る仕組みについて」

友人B:「いや～、わからないな。ああ、あそこにキーガン教授がいるから彼に聞いてみたらいいんじゃない？」

友人の指差す方を眺めてみると、旅館の大広間の一角に、発達心理学者のロバート・キーガン教授がいた。

私:「いや、キーガン教授の専門は美学じゃないと思うけど・・・」

私はそのように述べた。どこか私の中には、キーガン教授にその問いを投げかけるのをためらう気持ちがあった。一つには、キーガン教授の専門は発達心理学であって、美学ではないということ。もう一つには、その問いをもう少し自分で考えたいということがあった。

キーガン教授に質問してみようと述べた友人は、学部時代を米国の大学で過ごしているため、英語が流暢だ。自分たちでもう少し考えようと提案をするよりも先に、その友人はキーガン教授に声をかけていた。

友人B:「キーガン教授、少しお時間ありますか？ 今、ある問いが解けなくて困っているんです」

キーガン教授:「どんな問いだい？」

友人B:「美学の問題なんです。美学というのは、美について取り扱う学問なんです、その・・・」

キーガン教授:「美学の定義は知ってるよ(笑)」

友人B:「ああ、そうですね(笑)その中には色んなテーマがあり、とりわけ循環数列の破れの修復に関する問いなんです」

キーガン教授は、黙って友人の話の続きに耳を傾けている。友人がその問いについて紹介すると、キーガン教授は神妙な顔つきになった。その表情から察するに、キーガン教授をもってしても、その問いは一筋縄ではいかないようだった。そもそも、その問いはキーガン教授の専門分野とは関係ないように思えたが、キーガン教授は哲学にも造詣が深いため、何かしらの回答を述べることができるかもしれない、という淡い期待が一同にあった。

キーガン教授:「その問いはなかなか難しいね。ちょっと一緒に考えてみよう」

キーガン教授がそのように述べると、私たち四人は、大広間の一角で円になり、反時計回りにゆつくりと歩きながらその問いについて考え始めた。一步、また一步と足を前に出しながら、小さな円を四人がぐるぐる回る・・・。

誰もなかなか回答らしきものを提出しない。すると、キーガン教授が立ち止まった。

キーガン教授:「この問いは私には難しい。もう少し考える時間が必要だ」

立ち止まったキーガン教授は、一旦円の外に出て考え込み始めた。すると、発達心理学者として同じく著名なカート・フィッシャー教授がその場に現れ、同時に二、三人の友人が現れた。フィッシャー教授もそれらの友人も、私たちが回答しようとしている問いに関心を持ったらしく、円に加わった。そこで再びキーガン教授も円に加わり、私たちはまた反時計回りに円を描きながら、一步一步の歩みと共にその問いについて答えを出そうとしていた。

どれくらいの時間が経っただろうか。一向に誰も回答らしきものを提示しない。そこで私は一旦円から外に出た。すると、全員が同時に足を止めた。それを見たとき、全員がその場に座り込み、私だけが立っているような状態になった。そこで私は一つの提案をした。

私:「We haven't proposed any solutions so far. I thought the fundamental issue was not the problem itself, but the definition was. I mean that the definition of the problem is quite vague. Shall we clarify or articulate the definition first? In particular, what is an arithmetical progression and what does that mean by an "interruption" of progression?(今のところまだ何も回答らしきものが出ませんね。思ったのですが、そもそもその問題の定義が曖昧じゃないですか。まずは定義を明瞭にしませんか?特に、数列とはそもそも何であって、それが途切れるというのはどういうことを意味するのかという点が不明確なままだと思うんです)」

と私は皆に提案を持ちかけた。とつさに口から出てきた問いであったため、後々になって考えてみると、“interruption”よりも“rupture”という単語の方が、友人の述べる「数列の破れ」の語感をより忠実に表しているように思えた。しかしそれは些細なことであり、皆は私の提案に対して納得しているようだった。すると突然、友人たちが一斉に挙手をし、何か質問をしたがっているようだった。

友人たちはお互いに問いを投げ掛け合いながら、その問題の続きを考え始めた。その様子を見て、私はここで一旦休憩を取ろうと思い、食堂の方に向かおうとした。すると偶然、キーガン教授も休憩のために食堂に飲み物を取りに行こうとし始めた。キーガン教授と再会したのは久しぶりであったため、そこでお互いの近況を報告し合った。

キーガン教授がここ数年毎年日本を訪れている話をしたり、私はすでに米国を離れ、今はオランダにいることなどを話した。食堂に到着する前に、キーガン教授から極めて些細な質問を受けた。

キーガン教授:「コーヒーは何を飲むのかね？」

私:「コーヒー？いや、実はコーヒーを飲むことを最近控えているんです」

私がそのように回答をすると、キーガン教授は残念そうな表情を浮かべた。私もなぜ自分がそのような回答をしたのか定かではない。というのも、真実は全く逆であり、コーヒーを控えることなどしておらず、毎日コーヒーを必ず飲んでいるからだ。

キーガン教授:「このコーヒーはとても美味しいのに、非常に残念だ」

私:「それは何というコーヒーですか？」

キーガン教授:「コーヒーのソーダ割り」

私:「コーヒーのソーダ割り？そんなのがあるんですか(笑)」

キーガン教授:「あるよ、あそこに(笑)」

キーガン教授が指をさす方を見てみると、コーヒーの注ぎ口の真横にソーダの注ぎ口があり、両者を混ぜるだけでコーヒーのソーダ割りが完成するようだった。そんな飲み物が存在することを初めて知り、キーガン教授が笑顔で嬉しそうに手に持っている、その得体の知れない飲み物について私は考えを巡らせていた。そこで夢の場面が変わった。2017/11/7(火)06:10

No.393: Celebration for Sinterklaas

I arrived at Arnhem before 10AM. After the arrival, I noticed that the city was celebrating for “Sinterklaas” which is a traditional figure in Dutch culture. Although many families with kids were around the city center, this city gave me some comfort to stay.

I am in a cafe now to get me warm with hot coffee because it is very cold outside. Winter has come not only to Groningen but also to Arnhem. I will take a bus in 30 minutes to go to a hotel close to the national park. After checking in the hotel, I will see around the neighbor. I expect to

immerse myself in beautiful nature, which will nourish my psyche and soul. 15:07, Saturday,
11/18/2017

1749. 強い印象を残す夢の後半:全ての歴史を知る愛犬

自分で書き留めていながら、昨夜見た夢の前半の内容が鮮明に記憶に残っていることを驚く。あの夢が示唆するものは一体何なのか？興味深いシンボルがいくつも現れ、一つ一つについて今後考えを深めていきたいと思う。

夢の中に現れた「循環数列の破れ」という問いは、円になって循環的に歩きながらその問いについて考え、途中、私を含めて円から外に出るものがいたことと密接につながっているように思える。その他のシンボルについても多様な解釈が可能であり、それぞれのシンボルの関係性を考えることは自分にとって大切なことのように思える。

この夢の続き。その次に見た夢の唸り声がまだ聞こえてくるかのようだ。次の夢の中で、私は父方の祖父母の家に行った。祖父母の家は、平屋造りの一軒家である。

私は両親と共に、祖父母の家を訪れていた。どこか春の初めのような、あるいは、秋の初めのような太陽が家の中に差し込んでいる。その光はとても優しく、平和な世界を生み出している。家の中には祖父はおらず、祖母の声だけが家のどこからか聞こえてくる。

父が近くにいることには気づいていたが、母の姿は見えない。私は一旦祖父母の家から外に出て、田んぼの見えるあぜ道の上で、日記を書くことにした。いつもはコンピューター上で日記を書いているのだが、その時はなぜだか400詰め原稿用紙を持参し、手書きで日記を書こうとしていた。

日記の一行目を書き終えた時、あぜ道の後ろから一台の小さな軽トラックがゆっくりと走ってくるのに気づいた。それを見て、何も外で日記を書く必要などなく、家の中で書こうと思い、再び玄関から祖父母の家の中に入った。

太陽光が相変わらず穏やかであり、そこには依然として、この世のものとは思えない平穏な世界が広がっていた。

祖母と母の姿をまだ見ることができず、私は二人を探すために家の中を歩き回っていた。しかし、一向に二人を見つけることができない。いつも食事をしている部屋の網戸が開いており、太陽の光だけではなく、そこから優しい風が吹き込んでくる。すると突然、ある一曲のクラシック音楽が家中に鳴り響き始めた。それは交響曲でも協奏曲でもなく、流れてきたのは優しいピアノ曲の調べであった。

その曲の音量はとても大きかったが、一切不快に思わず、むしろ私はその曲に恍惚感を覚えるほどだった。そのピアノ曲は、ほのかな太陽光そのものであり、家全体に吹き込んでくる優しい風そのものに思えた。

その音楽に耳を傾けながら家中を探し回っていると、ようやく母の姿を見つけた。母は、寝室で仰向けになりながら寝込んでいた。疲労からくる風邪を患ってしまったのだろうか、熱を冷ますために冷たいタオルを額の上に当てている。その姿を遠目から確認した時、母に声を掛けることをせずそっとしておこうと思った。

母が寝込んでいる部屋の横にある部屋に、父の姿を確認した。父は愛犬と戯れており、私も一緒になって愛犬と遊び始めた。父が地べたに横になると、愛犬はさらに父にじゃれつき始めた。すると、愛犬が突然人間の声を話し始めた。いや、それだけではなく、体そのものが人間に近づき始めたのである。そこに現れたのは、アフリカ系の女性だった。そしてその女性は、この時代の人間ではないように思えた。

すると、その女性は、父の幼少時代のある象徴的な出来事について事細かに語り始めた。その女性は、全ての歴史を知る者であり、語り部であった。

父はその女性の話を頷きながら聞いており、彼女の話す内容は全て正しいことを確認しているようだった。父は、愛犬が歴史を詳細に知る人間に変化したことに驚いておらず、以前からそれを知っていたようだった。私は、自分の愛犬がまさか歴史を克明に語る人間に化けることができるとは知らず、その姿を見たときは相当に驚いた。その驚きはすぐに消えることはなく、しばらく続いていた。

愛犬の語る歴史の正確性に対して、私は背筋がゾッとした。それは、正確性が持つ恐怖、克明性が持つ恐怖だと述べていいだろう。過去の歴史があまりにも鮮明かつ正確に、現代の中に蘇生する際の絵も言わぬ恐怖だった。

歴史を語る女性は、再び小型犬の姿に戻り、父と愛犬は先ほどと変わりなく、再びじゃれ合い始めた。すると突然、部屋の中に置かれたテレビのスイッチが入り、CNNかFOXのニュースが流れ始めた。流れてくるニュースに意味はなく、だが、それが私に何かを気づかせたようであり、私は祖父母の家を離れ、自宅に戻ることを決心した。

家を出ると、なぜだかそこが品川の街になっており、私は駅に向かって歩いていた。人が全くいない品川の街。

祖父母の家に到着したのは先週の土曜日であり、今日も土曜日であるから、一週間ほどそこにいたことになる。遠くの方にコンビニがあるのを発見し、そこから一人の友人がこちらに向かって歩いてくる姿が見えた。その姿を確認した時、何も土曜日の今日に空港の近くに一泊してヨーロッパに帰るのではなく、もう一泊祖父母の家に泊まった方がいいのではないか、という考えが湧いてきた。

私は、こちらに向かってくる友人を尻目に、来た道を引き返し、祖父母の自宅に再度向かった。そこで夢から覚めた。2017/11/7(火)06:53

No.394: A Tranquil Place in Otterlo

I woke up at 5:30. The morning in Otterlo is very silent. The hotel at which I am staying is descent. I already finished breakfast. After eating breakfast, I was walking around the hotel, listening to bell sounds that were coming from a small tower close to the hotel. The sounds were recurrent whose repetitive sounds resonated with my inner sounds.

A clear blue sky spreads out in front of my eyes. I will prepare for check-out and walk to the Kröller-Müller Museum through the national park. 08:53, Sunday, 11/19/2017

1750. 自己それは刹那の気づき

昨夜未明に、天気予報通りに外気が0度になっていたようであり、早朝に書斎の窓から外を眺めると、草花に霜が降りていた。

今朝は五時前に起床し、五時を少し過ぎてから一日の仕事を開始させたが、今日はとても充実した一日になるという根拠のない予感があった。その日が充実したものになるという小さな予感は、確かに毎朝起床直後に感じるのだが、今日の予感はいつもより大きく深いものだった。

朝の八時から、日本を代表する人材会社の方たちとある企画に関する打ち合わせを行った。その企画に関して今日が最初の打ち合わせであり、私はその企画案に共感すると共に、このような話を持ちかけていただいたことへの感謝の念を持った。それは、大人の学びに関する対談企画であり、今日はその事前打ち合わせであった。

打ち合わせの中で行われていた、その場にいた四人の対話から私は多くのことを考えさせられ、新たな気づきや発見を得ていた。ここでは、そこでなされていた具体的なやり取りを書き留めることをしない。

対談後、朝食のフルーツを片手に、窓越しから外を眺めていた。一人の若者が自転車に乗って、この晴れ渡った世界を駆け抜けていった。それを見た瞬間、「真に進む者は立ち止まることのできる者である」という気づきが降ってきた。

私たちが成長を遂げていく時、その場に立ち止まることができるかどうかは極めて重要な点であるように思う。どういうことかという、私たちは進みながらにして真に前へ進むことはできず、その瞬間の中に立ち止まり、そこで湧き上がるものへ気づきの意識を与えることが重要になるということだ。まだ少し分かりにくいかもしれない。

要点は、人は成長しようという前のめりな気持ちだけでは成長できず、ましてや日々の仕事や生活を惰性に続けているだけでは成長などできないということであり、異常な速さで流れていくこの日常のさなかにあって、その瞬間の中に立ち止まることができるかが、自己の成熟に密接に関係してくるということだ。

一つ一つの刹那的な出来事に、感動の種子を見つけることができるだろうか。そこに、充実感や幸福感の種子を見つけることができるだろうか。

自己が成熟し、人生が深まっていくというプロセスの中で、こうした瞬間瞬間の出来事が内包する尊さを忘れてはならないように思う。自己深化というのは、そうした刹那の出来事と密接に結びついており、それを抜きにしては自己の深化を語ることも実現させることもできない。そのように考えてみると、自己の深化とは、刹那的な出来事への気づきの意識の総体であり、私たちの自己というのは瞬間瞬間の気づきに他ならないのではないか、という新たな考えが思い浮かぶ。

「ああ、自己は瞬間瞬間の気づきであったか」という驚きと感動の入り混じった言葉が漏れる。そして、「自己の深化とは、そうした刹那的な気づきが統合される過程で生じる現象なのだ」という内なる声が自然と漏れた。

今この瞬間に生きることをせず、刹那の出来事に潜む尊さと価値を見出せない者に、自己の深化も人生の深まりもないだろう。これは、このような現代社会の中で日々生きる自分の中に今紛れもなく生まれた一つの気づきの意識であった。

顔を上げると、早朝の太陽光が少し強さを増していた。それを見たとき、私はしばらくの間、瞬間の連続的な流れの中にあつたことを知る。2017/11/7(火) 10:12

No.395: Marriage between Nature and Art

I am writing this entry just outside of the Kröller-Müller Museum. The scenery in front of my eyes is saturated with deep forests reflecting on the sun shine.

Just some minutes ago, a number of art works including van Gogh's works brought a deep encounter with my psyche and soul. One of the significant aspects of this museum is that it consummates the marriage between nature and art. Of course, either nature or art bestows non-ordinary experience upon us.

However, the merger of both brings us much more profound non-ordinary experience. I have experienced that kind of experience some minutes ago. The quiet surroundings in the forests provide me with a deep rest. 14:07, Sunday, 11/19/2017

先週から今週にかけて、大学は試験週間に入り、講義もなく、私は自宅の書斎で絶えず生活をしてきた。人と直接会って話す機会がほぼ皆無であり、身体的に音として聞こえる声を一切聞くことなく、論文や書籍を通じて聞こえてくる著者の内的な声と自分の内的な声だけを聞きながら多くの時間を過ごしていた。一方、今日は午前中に、とある日本企業の方々とオンラインミーティングをした都合上、久しぶりに人と対話をするようになった。それが契機となり、何かが決壊したかのように、ミーティングの後から今にかけて独り言が途切れることはなかった。

ミーティングが終わったら、明後日に控えている最終試験に向けた準備をすぐにしようと思っていたのだが、自分が重要だと思っていることについて絶えず独り言をつぶやいている自分がいた。こうした独り言が淀みなく流れ出している時は、仕事など一切手につかない。そのため、この独り言をある意味落ち着かせるために、昼食前にランニングに出かけた。

昨夜の夜中に気温が0度になったためか、昼前も非常に肌寒く、もはや防寒着を着ながらランニングに出かける必要のある季節になったことを知る。ランニングに出かけたのは、それが心身の調整を兼ねた毎週に必ず行う習慣であるということ以上に、自分の独り言を落ち着かせる目的もあった。

ランニングに出かけてみると、最初はこの寒さについて考えていた。徐々に身体が温まってくると、今度は自分の身体に意識を向けてみた。ここで私は、先ほどからの独り言が落ち着いたと思っていたのだが、その矢先に、先ほどとは全く関係のない話題に関する内的な独り言が姿を現し始めた。それは、科学理論の検証可能性と反証可能性というテーマだった。このテーマ自体は古典的なものだと思うが、これまで自分の中で重要だと思って取り上げたことは一度もなかったように思う。

「科学理論」と言及したが、より狭義には、私たちが日々生活の中で活用している「理論モデル」あるいは「概念モデル」だと考えると分かりやすいだろう。結局、自分が日々行っていることは、直感や感覚から生み出された仮説を元にした、ある意味、主観的な概念モデルを生み出すことであり、その概念モデルを自分の経験データや、先人の思想や理論などと照らし合わせながら検証していくことに他ならないのではないかと思う。

科学的な仕事をしている最中に、主観と客観の問題は、これもまた古典的かつ重要なものとして向き合うことがよくある。科学に関して、多くの人が誤解しがちなことは、科学というのは客観的なものであり、それゆえに信頼に足るものだと思っていることである。確かに、科学は客観領域を主に司るものだが、仮説の出处や研究手法の選定とデータの評価に関して、主観性が一切混じらないかというそうではなく、むしろ多分に主観的なものが混じっている。ただし、そうした主観性が、科学的な真理を毀損しないような仕組みと方法が体系立てられているのが科学の世界だと言えるだろう。

このような誤解について一度考えを巡らせた後に、再び、概念モデルの検証可能性と反証可能性について考えていた。多くの人は、ここでも一つの誤解をしているように思う。科学的に打ち立てられた理論というのは、実はそれは完成物なのではなく、絶えず検証可能性と反証可能性を残したもののなのだ。そうでないものは、科学的な理論と呼ぶことはできない。

検証可能性というのは、その理論の確からしさをまた別の人が検証することができるかどうか、というものである。具体的には、ある研究者が打ち立てた理論について、外部データを参照しながらその理論を検証することができるかどうか、というものである。一方、反証可能性は、検証可能性とも密接につながっており、その理論に対して実験や観察を通じて反証する余地があるかどうか、というものである。科学的な理論は、少なくともこれら二つの特性を持っていなければならない。

検証しようがないもの、反証しようがないものは、まさに机上の空論であって、それは科学的な理論とは言えない。実は、これと同じことが、私たちが日々活用し、日々の実践の中で構築していく概念モデルについても言えるのだと思う。

先ほどの問題意識は、私たちは理論やモデルというものを過信しすぎたり、神聖視しすぎているのではないか、というものだった。端的に述べれば、既存の理論やモデルを、実験や観察を通じて検証・反証しようとする姿勢が希薄なのではないか、ということである。

仮に厳密な実験や観察を行わないとしても、少なくとも、自分の感覚に基づいた経験データと照らし合わせてみる必要があるのではないだろうか——実はこれは極めて重要である。つまり、なぜ人は、既存の理論やモデルを盲目的に信奉しようとし、自らそれを検証・反証しようとする姿勢を持たず、

それをさらに洗練させる理論やモデルを作ろうとしないのか、という点に問題意識を持っていたのである。

ランニングの最中、そして、ランニングの帰りに立ち寄った行きつけのインドネシアンレストランとチーズ屋においても、そのような問題意識が絶えず自分の中にあり、私は気づけば自宅の前にいた。

2017/11/7(火)13:39

No.396: A New but Different Ordinary Life

I came back to Groningen at night yesterday. I slept very well last night, which recuperated my energy. Although immersing myself in beautiful nature in the Hoge Veluwe National Park regained my energy, taking a bus and train to Groningen caused exhaustion a little bit.

I will start my ordinary life again and hope it to be something different from before in that it can be replete with the energy of nature and art. 07:34, Monday, 11/20/2017

1752. 概念モデルの検証と巫女

先ほど文章を書き留め、内的言語の奔流を少しばかり落ち着かせることができた。しかし、それでもまだ何か書き足りない感覚がしこりのように残っているため、それが何なのかわからないが、文章を書き始めることにした。

とりわけ先ほどの文章を通じて、自分が日々、過去の自分が構築した概念モデルの検証と反証を絶えず行うことに従事していることがわかった。自分の内側には、それこそ無数の概念モデルが存在しており、それを今日という日の体験や実践と照らし合わせて、既存の概念モデルを洗練させていくという試みを日々行っているようなのだ。

観察に次ぐ観察、実験に次ぐ実験を自らに課しながら、日々自分の概念モデルがこれまでのものとは異ったものになっていることに気づく。それは単純に、一つ一つの日記の中に見て取ることができるだろう。日記の一つの記事の中に、いかに自分の概念モデルが織り込まれていることか。そして、一つの日記記事を通じて、それらの概念モデルを検証し、さらに別の概念モデルへと書き換えを行っている姿を見て取ることができる。

「概念モデル」という言葉を用いると、血の通わない冷たいものに思われがちであるが、それは全く違う。私の中では、概念モデルというのは、血も肉もあり、感覚や感情が真に凝縮・梱包されたものだと思えている。そこから私は、概念モデルと思想との関係について考えていた。素朴な問いとして、概念モデルの絶え間ない洗練化の先に思想というものが初めて生まれるのか、それとも、思想とは概念モデルとは独立した存在として育まれるのか、ということである。

これについては、今はまだ明確な回答が自分の中にない。思想というものが、日々の思索と経験を通じて育まれていくものであるならば、前者の考え方に妥当性があるように思える。だが、概念モデルと小さく括っている集合の全体が、果たして本当に一つの思想体系になりうるのかは、まだ大きな疑問を残す。おそらくこの発想そのものが、一種の概念モデルであり、上記の二つの問いを内包するこの概念モデルを検証していくことが重要になるだろう。その時に、検証可能性を担保するために、もう少し概念モデルの形を整える必要があるかもしれない。

思想と概念モデルの関係に関する概念モデルの体裁を整え、それを検証の俎上に乗せていくことを行っていきたい。

午後の三時を迎え、薄曇りの空を眺めながら、昨夜に見た夢についてもう一度ここで思い返していた。アフリカ系の巫女が現れる夢。

一人の人間の歴史を全て知っているあの人物は何を象徴していたのであろうか。ある人間が別の人間の歴史を全て把握しており、物語を語るかのようにそれについて話す姿は、ある意味神がかっており、同時に絵も言わぬ恐怖を覚えさせるものだった。

自分ですらも忘れかけていた過去を取り戻すというのは聞こえはいいが、忘れ去られていく記憶の価値も忘れてはならないように思う。あるいは、忘れるということの中に、人間の尊さのある側面が存在しており、私たちが仮に一切忘れることなく全てを覚えているというのであれば、それは驚異的なことであると同時に、逆に不必要な苦しみを私たちにもたらしかねない。

あの巫女がなしえた業は人知を超えており、忘れるという人間の特性とは相容れぬものであったがゆえに、背筋の凍る恐怖を覚えたのだと思う。そのようなことを思いながら、これから夕方の仕事に取り掛かりたい。2017/11/7(火) 15:15

No.397: Today's Work

Since I went to a short trip last weekend without engaging in my work, I need to tackle with some work simultaneously within a couple of days. First, I will finish the first assignment for systematic review. I will wrap up my writing and send it to two professors, though the official deadline is way ahead. In order to make sure of whether I am following the intentions of some questions, I need to ask them by showing my answers.

Second, I will work on the assignment for advanced research methods. It requires me to delve in to a difference-in-difference (DID) analysis. I will reformulate my questions to the professor and send an article as another example of DID.

After lunch, I have a consulting session, a meeting with my friend, and a meeting with a professor. Today is filled with work like I am replete with energy. 07:44, Monday, 11/20/2017

1753. 探究心に燃えた人間の隣で

一昨夜に見た夢は大変印象に残るものであったが、昨夜の夢はそれほど印象に残るものではなかった。おそらく、昨夜の夢も印象に残っている方だと思うが、いかんせん、一昨日の夢の印象が強かったために、印象の比較による希薄化がなされているように思える。

昨日は夢の中で、ある研究棟のような場所で仕事をしていた。顔は分からないが、自分が師事している教授と共に研究棟の外にある公園を私は歩いていた。その方は日本人であり、どういうわけか私は自然科学系のその教授に師事をして研究を進めているようだった。

公園を歩いていると、突然その教授は、自然科学系の研究予算の話をし始めた。教授の話を聞きながら、金額として、自然科学系の研究予算は、社会科学系のものとは額が一桁か二桁異なるのだということを身にしみて理解した。

公園内をしばらく一緒に歩いていると、その教授は私が社会科学系の研究を行っているということをおぼえているのか、自然科学系の研究をするための予算を確保することがいかに難しいか、そして、社会科学系の研究程度の予算規模であれば、それを確保するのがいかに容易かを皮肉めいた形

でしゃべり始めた。教授の話に静かに耳を傾け、真実の度合いが高いものと低いものを区別している自分がそこにいた。

研究棟に入り、自分たちの研究室に向かうために、エレベーターで上の階に上がっていくと、途中の階でエレベーターが止まった。エレベーターのドアが開き、目の前には二人の男性が立っていた。おそらく、彼らも何かしらの研究員だろう。

私の横にいた教授がその二人の男性に向かって、研究棟の名前を確かめた。エレベーターが開いた瞬間に、どうも普段自分がいる場所とは異なっている様子をその教授は感じたのだろう。

二人の男性は、教授の質問に対して、研究棟名を教えてくれ、結局、私たちは間違った研究棟にいることに気づいた。私たちが普段研究をしているのは、「研究棟北G」である。

北にある研究棟に戻るために、エレベーターで下までおり、再び公園内を歩いて目的の研究棟に行こうとした。すると、脳内で大きな地図が立ち上がり、私たちの研究棟は東京の立川駅の前に位置しているイメージが見え、その教授が向かっている先はまたしても間違ったものだった。

研究棟に戻ることに關しては、特に急いでいるわけではなかったもので、教授の歩く方角に従い、大きな遠回りをして自分たちの研究棟に向かうことにした。随分と遠回りをした後、ようやく研究棟に到着し、自分たちの研究室に戻った。

研究室の窓際には、六人ぐらいが使える長机が置かれており、ある会社の社長を務める方が長机の一番左に座って、何やら熱心に勉強をしている。その方とは面識があり、私は声をかけた。

その方は、長らく会計学を専門的に扱っており、今もまだ会計学の探究に余念がないようだ。私が話しかけると、すぐにこちらを振り向き、その瞬間まで取り組んでいた問題を私に見せてくれ、その問題を解くことの楽しさを教えてくれた。何かを純粹に楽しむ子供のような無邪気な表情をその方を見せていた。

探究への充実感が私に伝播し、私もその方の右横の席に座って、窓越しに外を眺めながら自分の探究を始めた。何の専門書を自分が開いていたのかはわからないが、絶えず笑顔を見せながらテ

キストを食い入るように眺めているその方の様子は、私の内側の情熱を静かに掻き立て、同時にその方への敬意の念を強くさせていった。

その方と私は時を忘れてしばらくの間、各々のテキストを熱心に読んでいた。夢から覚める最後の最後まで、私たちは自らの探究に没頭していた。2017/11/8(水)06:59

No.398: Maria João Pires' Concert in Groningen

Yesterday, a big surprise happened to me. After getting up in the morning yesterday, I approached the window to open it. Taking a glance at a signboard on the street from the window, I noticed that the person on the signboard looked familiar with me. I thought that I saw her somewhere before. Then, I realized that she was a famous pianist, Maria João Pires.

I was wondering about whether she would come to this northern city in the Netherlands. I checked the internet for the information.

What a surprise! She will come to Groningen this weekend.

Probably, the last time I went to a music concert was four years ago when I lived in New York. Since I thought that this was a serendipitous opportunity, I promptly made a reservation for the concert.

I went to the Hoge Veluwe National Park last weekend, this weekend will be also marvelous because of the fortuitous opportunity to attend the concert. 08:11, Tuesday, 11/21/2017

1754. 厳しい成績評価

いよいよ明日は、今学期の最終試験の最後のものを受ける。昨日、先日に受けた「学習理論と教授法」のコースの最終試験の結果が、大学のポータルサイトを通じて知らせられた。いつもはサイト上の自分のページにアクセスし、そこで自分の試験結果を見ることができるのだが、今回はコースのページにアクセスし、そこに学生番号の書かれた一覧表があり、提出した論文と試験の結果が表示されていた。

論文と試験の結果のみならず、試験問題の各設問ごとに誰が何点取っていたのかが全て公表されていた。今回の期末論文は、四人で協働執筆したものであり、感覚として非常に良い出来だと思っていたのだが、評価はそれほど高くなかった。論文に関しては、10段階評価のうち7となっており、試験に関しては7を超える数字が付されていた。最初にこの一覧表を見たとき、自分の学生番号がないことを不思議に思っていたが、自分が番号を誤って記憶していたことに問題があった。

無事に自分の番号を確認し、結果を見たとき、やはりオランダの大学院で8を超える成績を獲得することは至難の技だと思った。9や10という評価は例外中の例外であり、滅多に付けられることのないものだ。

これまで8の成績を獲得できたのは、筆記試験のない、純粹に一人で論文を提出することが課題となっていた昨年のあるコースのみである。その時の論文の評価は、8.34ぐらいだったと思うが、小数点以下が切り捨てられ、8の成績評価が付いた。

昨年所属していた心理学科とは異なり、教育科学学科では、成績評価の小数点をそのまま残す慣習があるらしく、今回の最終的な成績は7.12となる。

オランダの研究大学院の成績評価の厳しさについては、これまで何度か書き留めているように思う。六年前に米国のジョン・エフ・ケネディ大学の大学院に留学した時の自分の知識や英語力であれば、おそらく成績評価の7を取得することなど不可能であり、全てのコースにおいて4.5から5.5ぐらいの成績しか取得できなかったのではないと思う。5.5、あるいは6を下回ると単位が付与されないため、もしかすると、六年前の私は、フローニンゲン大学の大学院で単位を何一つ取得できないというような状況に陥っていたような気がしてならない。これは誇張でも何でもなく、六年前と今の自分を比較してみた時に言える非常に明確なことである。

今回の試験結果の一覧を眺めると、45人ほどの受講者のうち、2名は8の成績を取得しているようだった。また、10段階中、1の成績を取得している者も2名いた。どうやら45名中、15名は追試になったようだ。この結果を見たとき、やはり随分と厳しい成績評価だと改めて思う。だが私が思うに、明日に控えている試験の方がより厳しい結果になるだろうと予想している。

明日の試験のコースは60名ほどの受講者がいるが、おそらく25名から半分の30名は、一回目の試験を突破することはできないだろう。追試を受けた者の中でも、下手をするとそこでも基準値を突破することのできない者が何名か生まれ、来年に再受講を余儀なくされる者が出てくるような気がしている。

そのコースでは、コンピューターラボでの課題が5つあり、その5つの成績が33%勘案され、残りの67%は明日のコンピューター上での筆記試験となる。5つの課題のうち、4つ目の課題までは成績評価が付いており、今のところ7.75の成績を獲得している。5つ目の課題の結果によって、また少し上下するだろうが、いずれにせよ、明日の試験の準備を入念に行う必要があることは確かだ。今日は一日の多くの時間を使って、明日の試験に向けた最終確認を行っていこうと思う。2017/11/8(水) 07:36

No.399: Vincent van Gogh's Letters

Last night, I took a long look at a book of paintings of Vincent van Gogh, which I purchased at the Kröller-Müller Museum. Van Gogh was the true person who devoted himself to both painting and writing. I was struck very much by his letters to his actual brother, Theo.

A series of letters to Theo cultivated van Gogh's soul as an artist and a human. I will closely examine his letters to grasp his essential philosophy of art and human nature. 08:21, Tuesday, 11/21/2017

1755. 時の流れぬ時の最果てで

本格的に寒い日が続き始めてから数日が経つ。冬の訪れを感じながら、私は今日なすべきことに絶えず従事していた。

午前中から昼食後にかけて、予定通りに明日の試験の準備を行っていた。今から少し時間間隔を空け、夕食前と夕食後に再び、作成したテキストの要約を確認し直したいと思う。今からしばらくは、研究とは離れた本を読みながら、ゆったりとした時間を過ごそうと思う。

昼食後、数年前に知った、福永武彦という小説家の作品に改めて感心を持った。ちょうど二年前に日本に滞在していた時に、福永武彦氏の日記集を購入したことがある。知人の一人が、福永氏の作品を高く評価しており、私も一度福永氏の作品を読んでみようと思ってから、二年以上の月日が流れた。

なぜだかわからないのだが、この二年の間に、福永氏の主要な作品の概要だけを確認することを何度も行っていた。そして、それらの作品を必読和書のリストに記載している自分がいた。

オランダで生活を送っている本日、再び同じことが起きた。福永氏の主要な作品について、再び自分の文献リストを辿り、その概要を確認する自分がいたのである。

どこかの日記で書き留めていたように、私は小説作品を読めない。これは文字通り、一つの作品を最初から最後まで読むことがどうしてもできないのだ。そのような特性を持っていることは十分承知であったが、先ほど意を決して、福永氏の主要な作品が収められた全集を10冊ほど購入した。福永氏の全集のうち、1巻から12巻までは小説となっていたが、最初の巻が適正価格では購入できず、また5巻は福永氏が別名で書いていた推理小説がまとめられたものであり、それにはあまり関心を持たなかったため、それら二冊を除いて10冊ほど全集を購入した。

二年間を超す年月の中で発酵されたものが自分の中にあり、それが福永氏の中心主題と何かしらの共鳴を起こしたのではないかと思っている。送り先はオランダの今の住所ではなく、実家にしておいたため、今度実家に帰省する際に、福永氏の全集を欧州に持ち帰りたいと思う。

福永氏の全集を購入後、日々の日課である昼寝を20分ほどしていた。久しぶりに、この短期間の仮眠の中で夢見の意識に陥っていた。この意識に陥り、再び目覚める時、20分の時間が6時間ほどに伸びたような感覚がした。この感覚は何であろうか。

夢が時間を超越し、長い時間をその空間で過ごしたという感覚がありながらも、夢から覚めた時に時間がほとんど経っていないことに気づくような体験である。それは少しばかり宇宙空間に出て行く感覚と似ているかもしれない。宇宙を旅して帰ってきた後、時代が何百年も先に動いていたことを知るのとは逆に、宇宙を旅して帰ってきたはずなのに、時間がほとんど動いていなかったことを示すような不思議な感覚がした。

時の流れぬ時の最果てを訪れ、そこから帰還した際に、時の最果ての恩恵である時の不流現象がこちらの現実世界にわずかに滲み出しているのではないか、と思わせるような体験であった。

現実世界の時の流れがとても緩やかに流れていく。オランダで生活を始めて一年以上の月日が経った。過ぎ去った日々を思い出すことを今はしない。なぜなら、それらの思い出は常に今この瞬間の自分の中に顕現し続けており、思い出すことなどできないはずのこの瞬間の現実感覚に他ならないだからだ。

時計の針が午後3時を告げている。これからもう少し気の済むままに研究に関係のない書物を読み、夕食前から再度明日の試験に向けた準備をしようと思う。2017/11/8(水) 15:15

No.400: Van Gogh's Guidance

Yesterday, I had a meeting with two friends of mine, both of whom are international students. Although we talked about diverse topics, one question was very intriguing to me. That was: "What brought us to the Netherlands?"

Of course, my destiny and entangled various factors brought me here. Yet, I thought that I could not forget about the influence from van Gogh. I don't know why, but I feel that he is not other person but none other than myself. I can find van Gogh within me. It is a huge revelation that someone else can be me. In other words, the possibility of identifying us with somebody else can exist. I cannot help but think that Van Gogh brought me to this country. 08:40, Tuesday, 11/21/2017

1756. 夢遊病とライフワーク

夕方を迎え、そろそろ明日の試験に向けての最終確認を再開させようと思う。数時間ほど学術的な文章から離れ、気の済むまでに和書を読んでいた。また、文章の内容とは全く関係なく、東京芸大の作曲科について調べている自分がいた。

今のような形で日本企業との協働プロジェクトを進めていけるのであれば、急いで大学の教授になるよりも、しばらくは自分の探究活動を納得いくまで進めるような生活を送ってもいいのではないか、

という考えがある。もし仮に、日本の大学で今後学びを得ようと思うのであれば、東京芸大ぐらいしか行き先がないのではないかと思った。そこで、仮に大学院に入学するのであれば、どのような条件が課せられているのか確かめてみた。

調べる前から当然わかっていたことだが、自分のような者には到底入学できない前提条件がそこで課せられていた。日本に戻る道はどうもないらしい。やはり欧米の総合大学の中で研究生活を続けながら、その合間合間に音楽科の作曲コースを聴講することが賢明であるように思われた。

作曲について探究をしたいという思いが膨らめば膨らむほど、人間発達の探究を行いたいという思いが膨らむ。探究衝動の膨張的共鳴。

作曲実践を行おうとする膨張的な意志と、人間発達に関する研究を行おうとする膨張的な意志が重なり合う時、膨張の協和音の中に自分が溶け込んでしまいそうな感覚がする。それら二つの探究と実践を、もう私は止めることなどできないだろう。

来年に席を置くであろう米国の大学では、それらの二つの探究に存分に従事できるだろうという大きな期待がある。作曲を通じて人間発達について考察と研究を行い、人間発達の考察と研究の成果を作曲に取り入れることができればどれほど幸せな日々であろうか。

自分はまだ夢を見ているのかもしれない。これほどまでに覚めて欲しくない夢は他にあるだろうか。

おそらく、全ての人は独自の夢の世界の中で毎日を生きているのだが、それが夢であるということに気づけないがゆえに、実生活での夢遊病を患う。自分が絶えず夢を見ていて、夢の中の世界に絶えずいるのだという明晰な自覚。この明晰な自覚があれば、人生の最後の日まで自分の夢の中で生きていくことができるのだろうか。

昨日、どう生きるかについて、仮に既存の社会的構成概念を適用するなら、どう表現されるのかを自分に問うていた。つまり世間一般で「職業」と括られる概念で自分の生き方を捉えたと、どのような回答を自分が真っ先に発するのかを待っていた。すると、「音楽家のように、詩人のように生きること。そして、科学者であり、哲学者としても生きたい」という回答が生まれた。それは本当に自分の純粋な想いであるように思えた。

音楽家のように生き、詩人のように生き、科学者として生き、哲学者として生きること。この世界は、そうした生き方に充実感と幸福感が感じられないような世界ではないと信じたい自分がいる。

それら四つの職種に関する仕事ができなくてもいい。望むのは、それら四つの仕事に内在する本質的な特性を携えて日々を生きることである。

自分自身を信じるのがますます難しい世の中になり、この世界を信じるのがますます困難な時代になっている。科学、哲学、芸術の中に、そうした時代に対する救済の道は残されていないのだろうか。

そこに救済の道があるのかないのか。その道の存在を確かめることだけに残りの人生の全てを捧げてもいいのではないか。そのような思いが自分の内側から湧き上がってくる。むしろ、そうした救済の道を自らの存在をかけて見出していく以外に、自分の生きる方法はないように思える。

「ライフワーク」という浅薄な用語の仮面の奥にある深遠な意味に気づくことができるだろうか。一人の人間の短く、そして小さな人生をかけ、生きることそのもののの中で創ることを「仕事」と述べてはダメなのだろうか。そうした仕事を通じて、このような現代社会への救済の道を見出そうとすることを仕事だと述べてはダメなのだろうか。それを社会的な存在として宿命づけられた人間として生きることだと述べてはダメなのだろうか。2017/11/8(水)17:15

No.401: Vincent van Gogh's Comprehensive Letters and Paintings

Since I could start today's work in the early morning, my work has been going very well. One last thing I want to write down here is that I will closely read van Gogh's letters to understand his philosophy of art and human nature. Also, I want to grasp his developmental process as a painter. I purchased a book of paintings of van Gogh, which is a Japanese translation. Because I wanted to read an English translation,

I was looking for another book about van Gogh. Fortunately, I found a splendid edition which has six sets of books with full color pictures and comprehensive letters. This book is marvelous in that each letter corresponds to a picture of a painting, which fosters my understanding of the

context of van Gogh's paintings. Although the price of the book was relatively expensive—£360 (€400)—, I regarded it as an early Christmas gift and a late birthday present for me. 08:52, Tuesday, 11/21/2017

1757. 今学期の試験の終了

今日は早朝の六時に起床し、すぐさまシャワーを浴びて身支度をし、そこから八時過ぎまで最終試験の最終確認をしていた。九時から始まる試験に向けて自宅を後にし、試験会場であるザーニクキャンパスに向かった。

天気予報では小雨が降りそうだったのだが、雨が降る様子はなく、薄い曇り空が広がっていた。ザーニクキャンパスは、主にコンピューター試験の時にしか足を運ばないのだが、このキャンパスに向かって歩いている最中は、いつも自分の心が静かになる。

今朝はもうマフラーを首に巻き、寒さはかなりのものであったが、歩いてキャンパスに向かっている最中は清々しい気分になっていた。運河沿いにあるサイクリングロードを歩きながら、試験以外のことを考えている自分がそこにいた。

来週から始まる新しい学期においては、今学期と同様に三つのコースを受講することになるが、そのうちの二つは筆記試験が課せられていない。残りのコースもスケジュール上は筆記試験が組まれていないのだが、シラバスには筆記試験に関する記述があるため、実際にコースが始まってみなければ試験があるのかどうかはわからない。いずれにせよ、ザーニクキャンパスで試験を受ける回数もう後わずかとなっていることに気づく。

試験会場の建物に到着し、外のベンチに腰掛け、軽食を食べてから会場内に足を踏み入れた。試験がある時はいつもこの会場は人でごった返しており、今日もそうだった。広大なコンピュータールームの前に到着し、数分間ほど最後に資料を眺めてから会場内に入った。

昨年の今頃に初めてコンピューター試験を受けた時は、操作に少し手間取ったが、今となっては随分と慣れたものである。環境がパフォーマンスに及ぼす影響が随分と軽減され、この広大なコンピュータールームで試験を受けることがホームのような感覚がするのが不思議であった。

今回の試験は、教育学科固有の三時間という長丁場のものである。コンピューターにログインし、試験問題を開けると、合計で24問の問題が画面に表示された。22問は、一、二行の設問に対して120字の字数制限で回答してくるものであり、残りの2問はケーススタディであった。

問題の数を見た時には、かなり多い印象を受けたが、そのような印象に囚われている暇はなく、早速1問目から取り掛かることにした。1問目を無事に回答した瞬間、画面が突然フリーズし、コンピュータートラブルに見舞われた。その瞬間は一瞬戸惑ったが、すぐにIT担当の係員を呼び、問題を早急に解決してもらった。

数分ほど時間をロスしたが、何事もなかったかのように2問目から回答を続けていった。一時間半ほど時間が経つと、受験者の何名かがトイレ休憩に行く姿が見え、教育学科の三時間の試験においてはトイレ休憩が許されていることを思い出した。

昨年まで在籍していた心理学科の試験では、トイレ休憩を挟むことはできなかったため、その点は小さいようでいて大きな違いである。私も二時間ほど経った時に、一度トイレ休憩に行き、一息ついた。

休憩後から22問目の問いに回答し、残り50分を残してケーススタディの2問に取り掛かることができた。その時に、コンピュータートラブルやトイレ休憩があったとしても、時間的には随分と余裕があると思った。

残りのケーススタディを十分に時間をかけて回答し、余った時間を全ての回答の見直しにしようと思った。ところが実際にケーススタディの2問に回答してみると、残り時間が15分だけとなり、そこから駆け足で全ての回答の見直しに入った。

文章を付け足す時間的余裕などなかったため、スペルチェックのみを行っていった。いくつかスペルミスが見つかり、そうした点を修正したところで時間一杯となった。試験の問題について述べると、奇をてらったような問題はほとんどなく、全て今回のコースの内容を反映した練られた問題だと思う。一問だけ、問題文を読んだ瞬間に全く回答できなさそうなものがあり、その問いについては適当に文章を埋める形になったが、その他の問題は想定内のものだった。

全ての回答をコンピューター上からサーバーに提出し、席を立とうとした時に、実証的教育学のプログラムコーディネーターかつこのコースの担当教授の一人であるマイラ・マスカレノ教授が私に話しかけてきた。

マスカレノ教授:「ヨウヘイ、試験はどうだった？」

私:「一問だけ全くわからないものがありました。“crossed design”と“nested design”の違いに関する問題です」

マスカレノ教授:「ああ、リサーチデザインに関する問題ね」

私:「ええ、あの問題に対しては準備不足でした。自宅に帰って改めてテキストで調べておきます」

マスカレノ教授とそのようなやり取りをし、試験場を後にした私は、それら二つの概念について考えていたが、それらが講義で取り上げられた記憶がなく、自分の記憶の中にはそれらの概念が通った跡すらなかった。自宅に戻り、すぐさまテキストを開けて調べてみると、それらの概念についての説明が確かに記載されていることを発見した。だが、それらの項目は自分の中では些細なものとして扱っており、最初から学習範囲から外していたため、それらについて回答できなくても無理はなかった。

今回の一件で興味深かったのは、自分が学習対象だとみなしたものは、自分の内側で概念ネットワークを構築しており、実際に試験でそれらの概念のいずれかが問われた際には、それはその概念ネットワークの中に確かに存在しているという感覚が即座に起こることだった。先ほど、「概念が通った跡」という表現を用いたが、まさに一度学習したものは、自分の内側の世界を通ったことがある、という確かな感覚を引き起こす。学習の頻度と密度が高まれば高まるほど、概念ネットワークが堅牢なものとなり、その感覚がより強くなっていく。

24問のうち、23問についてはそうした感覚が引き起こされ、その1問に対してはそうした感覚が一切引き起こされなかった。自分の内側にある見えない知識のネットワークが確かに存在しており、そのネットワークの中にあるものが何であり、その中にないものは何なのかが、試験問題を通じて明らかになったことは大変興味深い経験であった。2017/11/9(木) 15:28

No.402: A New Research Plan

I finished writing the draft of an overview of my new research. The new research investigates MOOCs from complexity science perspectives.

I wrote about a problem statement, tentative research questions, and a method section. This research topic is what I have wanted to explore for a long time, and thus, I look forward to the actual start of this research; of course, I can say that the research planning phase is already a beginning of my research.

Since I have several next research topics that link with this new research, I expect it to be the precious source of my future studies. 20:16, Tuesday, 11/21/2017

1758. これから

今学期の試験が無事に終わり、少しばかり安堵している。試験会場から自宅に戻る途中で社会科学キャンパスに立ち寄り、そこで来学期に受講するコースの必読論文を印刷した。

「システマティックレビューの執筆方法」というコースの課題論文は、すでにポータルサイトにアップロードされており、それらを全て印刷した。このコースに対する期待感は強く、実際に毎回のクラスの課題を通じて、自分でシステマティックレビューの論文を執筆していくことになる。

これまで一度もシステマティックレビューを執筆したことがなく、それは私にとって初めての経験となるが、今年の修士論文にせよ、さらには今後の博士論文や書籍にせよ、システマティックレビューの執筆方法は非常に有益な文章執筆方法であり、その理論と方法をこの機会に習得することができるのはとても有り難い。

自分の研究テーマや実務の性質を考えてみた時に、今後本格的なシステマティックレビューを執筆する可能性は低いが、この文章執筆方法の発想は、今後執筆する小さな論文や書籍の中にも活用していきたいと思う。あるいは、何か調べ物をし、それをまとめるようなレポートを書く際にも、アプローチとしては同様のものを活用することができるのではないかと考えている。

システマティックレビューについてはこれから深く学ぶことになるが、端的に述べれば、それは定量的かつ定性的な文献レビューの代表的な方法だと言える。似たような論文執筆技法にメタアナリシスというものがあるが、こちらは定量結果をメタ的にレビューしていく方法のことを指すと理解している。

現在、私が在籍している「実証的教育学」のプログラムに在籍している者は私だけだが、プログラムの内容の充実振りには大変満足している。正直なところ、昨年のプログラムにおいても随分と科学的な発想とアプローチに関して体系的な訓練を受けたと思っていたが、今年のプログラムはそれ以上である。人間発達と学習について、このように厳格な科学的トレーニングを積むことができる毎日を有り難く思い、その充実感は申し分ない。

少なくとも何とか後10年ほどは、こうしたトレーニングを積めるような立場と環境を維持したいと思う。大学で教える立場になることを何とか先延ばしにしたいと思うのは、教授陣たちは一様に、こうしたトレーニングを提供する側に回った途端に、自らにそうしたトレーニングを課さなくなることを私は知っているからである。そこには地位の問題や時間の問題なども絡んでくるだろう。幸運にも、私にはいくつかの仕事があるため、学術の世界において教授としての地位を求めるのではなく、そうした地位とは離れたところに位置取り、類を見ない形で長期的な継続トレーニングを自らに課している。

仮にここからの10年間に於いて、大学で教えることになったとしても、それは博士課程におけるティーチングの一環にとどめておきたい。もし、望まない形で教授のポジションが与えられた場合にも、その大学における他の教授の授業を毎学期聴講し続けたいと思う。

自分が科学者としてのキャリアを歩もうと志したのは、30歳を迎える頃であり、その時になって初めて、自分が科学者であることに気づいた。それまでの30年間でどれだけ知的に怠惰であったかを私は知っているため、もうあのような怠惰な生活を送りたくないのである。規律と克己ある形で、絶えず鍛錬を続けていく生活の中で人生を終えていきたいと強く思う。

昨日、同志を求めるような無意識が働いていたのか、博士号取得に関するギネス記録を眺めていた。すると、申請されている記録上、博士課程を三つ持っている人が世界にいるようだ。ギネス記録

が博士号三つというのは、随分と少ないように感じた。というのも以前から、自分の関心領域に沿って探究を続けていけば、知らず知らずのうちに、博士号を三つほど取得することになるだろうと思っていたからである。

言うまでもないが、学位の数にこだわりなどなく、自分の関心に沿って学術機関で時を過ごしていたら偶然にそのような数の学位になるかもしれないというだけの話である。現在は、欧米で取得する三つ目の修士号のプログラムに在籍しているが、そのような数になったのも、純粋に自分の関心を探究できる場所に身を置いた結果として、そのような学位の数になっただけである。

成人になると、修士号以上の学位は、基本的にはキャリアアップのために取得されることが多いだろう。しかし私の場合は、間違ってもそのような形で学位を取得しないようにしている。

今、「キャリアアップ」という言葉を記載することも若干ためらわれたが、そのような形式で学位を取得しようという気持ちが一寸でも入り込む場合、そこには真に有意義な探究は実現されず、真に深めるべきものが深まらないであろうことを知っている。

話が脇道に逸れたが、とにかく私はこれからも、社会が投げかけてくる甘言や偽言を払いのけ、探究そのもののためだけに探究を続ける。「探究」などという言葉を使う必要のない日が早く来て欲しい。それが人生そのものに、日々そのものにならないといけない。探究などという言葉を使っているうちは、探究などしていないのであり、全く何も始めていないのである。

欧米で生活を始めてから六年が経つが、やはりまだ何も自分の中では始まっておらず、これからなのだという気持ちが強い。他人の声のするところには一切足を踏み入れず、他人の声など一切聞かないようにする。そうしたあり方が今後ますます重要になるだろう。2017/11/9(木) 16:08

No.403: Waltz Accompaniment

Last night, I was thinking about how to apply inversions to a waltz accompaniment. Basically, the lowest note of a chord is played alone on the first beat, whereas the middle and highest notes are played together on the second and third beats in a waltz accompaniment.

If I want to apply inversions to the bass part, how can I do that?

I have to invert a note when I apply an inversion, which automatically breaks the principle of waltz accompaniment. I was wondering about whether it was acceptable or not. I need to check an exceptional case to use inversions for a waltz accompaniment. 09:16, Wednesday, 11/22/2017

1759. 今日と明日、そしてこれからも

今日は無事に今学期の最終試験を終えたため、今日の残りの時間は久しぶりに和書を読んだり、作曲実践に多くの時間を充てたいと思う。明日からは、来週から始まる来学期のコースに向けて課題文献を読んでいく必要がある。しかし、試験がない分、精神的にはゆとりがあり、ようやくシステム科学やネットワーク科学の探究を再開できそうだ。それらと合わせて、ジョン・デューイやジル・ドゥルーズの教育哲学に関する専門書を読んでいきたい。

書斎の机の右隅に、何冊もの専門書と束になった論文が山を作っている。自分の内側に知識体系の山を作っていくことに平行して、書斎の机の上にできあがった山は姿を消していくだろう。

明日は、来年の六月にロンドンで行われる学会の研究発表に向けた応募書類を作成する。ちょうど五月末から六月の頭にかけて、アムステルダムで国際ジャン・ピアジェ学会に参加することを予定しているが、それから二週間後にもロンドンの学会に参加しようと思っている。こちらの学会は、今年の論文アドバイザーを務めてくださるミハエル・ツショル教授が紹介してくれたものであり、「国際学習科学学会」とでも訳される名前の学会だ。

その学会で昨年の研究内容を発表するための応募資料のドラフトを明日中に作成しておきたいと思う。分量としては多くなく、4ページほどの論文であるため、ドラフトの初校を完成させるのにそれほど多くの時間はかからないだろう。そのドラフトを執筆し終えたら、日本のある人材開発会社の月刊誌へ寄稿する文章のドラフトを作成したい。こちらは、7,500字ほどのものである。

すでに半分ほど執筆しており、残りに関してもすでに構成が出来上がっているため、比較的速やかに文章を執筆していくことができるだろう。二つのドラフトを明日中に完成させ、数日間文章を寝かせ、月曜日に再度レビューをした後に、学会応募資料のドラフトはツショル教授に提出し、寄稿記事のドラフトはその会社の編集者の方に提出する。

今は日本の企業社会への関与に関して、二つほど大きなプロジェクトに従事しており、その他にも二つほど小さなプロジェクトに参画している。四つのプロジェクトを進めながら思うのは、こうした仕事があることの有り難さであり、それ以上に思うのは、協働者の方々の大切さである。

研究も実務も、そして作曲実践も含めて、それらは一つの同一の物事の別の側面に過ぎず、それら全てが一つの生活を形成し、一つの人生を形成していると言える。全ての物事を一つの同一の事柄として従事できる生活を営むことができ、これ以上ない充実感と至福さを感じている。

これから就寝までの時間も、充実感と幸福感の中で過ごし、それを明日へとつなげていきたいと思う。充実感と幸福感は、連続的でも非連続的でもなく、常に今この瞬間の中にあり続けているものなのだ。2017/11/9(木)16:38

No.404: The Intersection between Nature and My Existence

I finished the draft of the second assignment for systematic review. It did not take so much time than I expected. I will read some articles for my new research, all of which would provide me with intellectual pleasure.

The present weather in Groningen is exquisite as if Debussy and Ravel's music came out from it or as if Monet and Renoir's paintings showed up from the sky. The ephemeral beauty induces awe toward the intersection between nature and my existence. 16:38, Wednesday, 11/22/2017

1760. 息づく破壊衝動と夢

昨夜、自分の内側にある破壊衝動のようなものが姿を現した。最初は、自分の内側の世界を全て粉々にしたいというような衝動だった。だが、そこから考えが休まることはなく、外側の世界の破壊に向けた衝動に飲まれそうになっていた。自分も含め、生きとし生けるもの全て、この世界の全ての存在に対して、一切の痛みも苦痛も与えることなく一瞬にして粉々にすることの中に意義を見出している自分がいた。

少しばかり恐ろしい衝動と考えが自分の中に静かに息づいていることに気づく。そのようなことを考えるのは冬のせいだろうか、と思った。

そのようなことを考えるのは冬のせいだろう、と思った。本当に冬のせいだろうか、とさらに考えた。

今朝は六時前に起床し、六時を少し回ったところで今日の仕事を開始した。今日は昨夜の計画通り、学会の応募書類と寄稿記事のドラフトを完成させたい。昨日は最終試験が朝からあったため、その前夜に見た夢について書き留めておく時間的余裕がなかった。その夢の内容をまだ覚えていたため、ここで書き留めておきたい。

夢の中で私は、見覚えのある校舎の中にいた。高校時代に仲の良かった友人が、学校の中で財布の盗難にあったようだった。その友人はとても落胆しており、同時に動揺の色を隠せていない。財布の色や形、そして最後に財布を見たのはいつか、ということを友人に尋ねていると、小中学校時代に仲の良かった友人の一人が、「財布が見つかったよ！」と廊下の階段の上から私たちに英語で叫んだ。

私もとっさに英語で返答したが、よくよく考えてみると、その場にいた三人は日本人であったから、その気づきが生まれてからは日本語に切り替えた。

財布を盗まれた友人と私は大いに喜び、お互いに抱き合うかのように、財布が見つかったことを嬉しく思った。

私:「どこにあったの？」

小中学校時代の友人:「四階の居酒屋。店長が財布を見つけてくれたって」

財布を盗まれた友人と私は、すぐさま校舎の四階にある居酒屋に向かった。居酒屋の入り口から店内に一步入ると、そこには非常にこじんまりとした空間が広がっていた。

多くて15名ぐらいしか入れないような店だったが、店内は極めて明るい。入り口の付近に三名ほどの男性客がおり、真ん中の席に二名ほどの男性客がいた。

友人と私はすぐさま店長に話しかけ、財布を見つけてくれたお礼を述べた。すると突然、入り口付近にいた三名の韓国人が祝福の歌を歌い始めた。

友人と私は、カウンターで料理を作る店長の前に立っており、その位置はちょうど二人の中国人の客の席の横だった。三人の韓国人は、しきりに祝福の歌を歌い続けている。

徐々に声量が大きくなっていく。私は横にいた中国人二人に、「韓国語がわからないんです」と英語で伝えた。すると、二人の中国人もうなづいており、とりあえず、その場にいた全員で財布が見つかったことを喜んだ。

歌が静かに終わりへ向かっていくと、最後は全員で拍手喝采をした。居酒屋の外いた人たちは、「何事か？」という表情を浮かべながら店の前を通り過ぎていく。友人と私が顔を見合わせた瞬間に夢から覚めた。2017/11/10(金)06:46

No.405: A Waltz Accompaniment

I composed music using a waltz accompaniment. However, I was struggling with how to harmonize my melody with the waltz accompaniment. Since this musical work was also an experiment for my music composition, I tried to forcefully use a waltz accompaniment without considering the nature of the melody.

What are fundamental criteria to apply a waltz accompaniment? I was thinking about them, but I did not get a clear answer.

Applying a waltz accompaniment to the entire 40 measures, I noticed that the work lacked variety; in other words, it was dull. I have to grasp the essence of using a waltz accompaniment. I guess that there are some preconditions and requirements for using it.

Before going to bed, I looked at Chopin's music scores of his waltz music and actually listened to some pieces of his music. All of them blew my mind. I was so grateful because there was a long way to compose such music. 13:17, Thursday, 11/23/2017